Astrophysics of Gaseous Nebulae and Active Galactic Nuclei



2006-12-07 (Thu.) Koizumi Osamu



電離ガス雲内の各点での熱平衡を考える

(エネルギー獲得量)=(エネルギー損失量)

獲得過程…光電離 損失過程… 再結合、free-free、衝突励起、による放射

今回はこれについて詳しくみていく

O⁺, O⁺⁺, N⁺ などの low-lying energy level の衝突励起放射 非常に重要な放射冷却源

これらのイオンは abundance は小さいが、 kTのオーダーの励起ポテンシャルのエネルギー準位をもつ。



2000 Å - 6000 Å の光子は 2 eV - 6 eV のエネルギー 1 eV ~ 10⁴ K **3.5 Energy Loss by Collisionally Excited Line Radiation** level 1 にあるイオンが電子衝突で level 2 へ励起される <u>励起に対する断面積 $\sigma_{\mu}(u)$ </u> $\chi = hv_{21}$ 以下では $\sigma_{12}(u) = 0$, $\chi \approx hv_{21}$ では $\sigma_{12}(u) \propto u^{-2}$ $\sigma_{12}(u) = \frac{\pi \hbar^2}{m^2 u^2} \frac{\Omega(1,2)}{\omega} \quad \text{for} \quad \frac{1}{2} m u^2 > \chi \quad (3.14)$

 $\Omega(1,2)$ collision strength, ω_1 statistical weight

 $\Omega(1,2)$ はほぼ一定になるので、これで $\sigma_{12}(u)$ を表すと便利。

熱平衡 → 詳細均衡の原理 $(u_1 \sim u_1 + du_1$ の電子の衝突励起数) $=(u_{\gamma} \sim u_{\gamma} + du_{\gamma}$ の衝突下方遷移数) $n_{e}n_{1}u_{1}\sigma_{12}(u_{1})f(u_{1})du_{1}=n_{e}n_{2}u_{2}\sigma_{21}(u_{2})f(u_{2})du_{2}$

熱平衡のボルツマン方程式より



$$n_{e}n_{1}u_{1}\sigma_{12}(u_{1})f(u_{1})du_{1} = n_{e}n_{2}u_{2}\sigma_{21}(u_{2})f(u_{2})du_{2}$$

$$\longrightarrow \frac{n_{2}}{n_{1}} = \frac{u_{1}du_{1}}{u_{2}du_{2}}\frac{\sigma_{12}(u_{1})}{\sigma_{21}(u_{2})}\frac{f(u_{1})}{f(u_{2})}$$

$$\frac{1}{2}mu_{1}^{2} = \frac{1}{2}mu_{2}^{2} + X \quad (3.16) \quad \rightarrow \quad u_{1}du_{1} = u_{2}du_{2}$$

$$f(u) = \frac{4}{\sqrt{\pi}}\left(\frac{m}{2kT}\right)^{\frac{3}{2}}u^{2}\exp\left(-\frac{mu^{2}}{2kT}\right) \quad (2.6) \quad , \quad \frac{n_{2}}{n_{1}} = \frac{\omega_{2}}{\omega_{1}}\exp\left(-\frac{X}{KT}\right)$$

$$\bigstar \frac{\omega_{2}u_{2}^{2}\sigma_{21}(u_{2})}{\omega_{1}u_{1}^{2}\sigma_{12}(u_{1})} = \exp\left(-\frac{1}{2}mu_{1}^{2} + \frac{1}{2}mu_{2}^{2} + X\right) = 1$$

$$\omega_2 u_2^2 \sigma_{21}(u_2) = \omega_1 u_1^2 \sigma_{12}(u_1)$$
 (3.15)

$$\sigma_{12}(u) = \frac{\pi \hbar^2}{m^2 u^2} \frac{\Omega(1,2)}{\omega_1} \quad \text{for} \quad \frac{1}{2} m u^2 > \chi \quad (3.14)$$
$$\omega_2 u_2^2 \sigma_{21}(u_2) = \omega_1 u_1^2 \sigma_{12}(u_1) \quad (3.15)$$

(3.15)に(3.14)を代入

$$\sigma_{21}(u_2) = \frac{\omega_1 u_1^2}{\omega_2 u_2^2} \sigma_{12}(u_1) = \frac{\omega_1 u_1}{\omega_2 u_2^2} \frac{\pi \hbar^2}{m^2 u_1^2} \frac{\Omega(1,2)}{\omega_1}$$
$$\bullet \qquad \sigma_{21}(u_2) = \frac{\pi \hbar^2}{m^2 u_2^2} \frac{\Omega(1,2)}{\omega_2} \qquad (3.17)$$

collision strength は 1,2 に対して対称な形をしている。

3.5 Energy Loss by Collisionally Excited Line Radiation 結局、単位時間・単位体積あたりの衝突下方遷移率は $n_e n_2 q_{21} = n_e n_2 \int_{0}^{\infty} u \sigma_{21} f(u) du$

$$= n_{e} n_{2} \left(\frac{2\pi}{kT} \right)^{\frac{1}{2}} \frac{\hbar^{2}}{m^{3/2}} \frac{\Upsilon(1,2)}{\omega_{2}} \quad \text{cm}^{-3} \text{s}^{-1} \quad (3.18)$$
$$= \frac{8.629 \times 10^{-6}}{T^{1/2}} \frac{\Upsilon(1,2)}{\omega_{2}}.$$

ここで Y(1,2) は velocity-averaged collision strength で、

$$Y(1,2) = \int_0^\infty \Omega(1,2;E) \exp\left(-\frac{E}{kT}\right) d\left(\frac{E}{kT}\right) \quad (3.19) \quad \text{where} \quad E \equiv \frac{1}{2} m u^2$$

同様に、衝突励起数は $n_e n_1 q_{12}$ と書かれる。ここで

$$n_{e}n_{1}q_{12} = n_{e}n_{2}q_{21}$$
, $\frac{n_{2}}{n_{1}} = \frac{\omega_{2}}{\omega_{1}}\exp\left(-\frac{\chi}{kT}\right)$

の関係から、

$$q_{12} = \frac{\omega_2}{\omega_1} q_{21} \exp\left(-\frac{\chi}{kT}\right) \\ = \frac{8.629 \times 10^{-6}}{T^{1/2}} \frac{Y(1,2)}{\omega_1} \exp\left(-\frac{\chi}{kT}\right). \quad (3.20)$$

collision strength は量子力学を用いて計算する必要がある。 最も重要なものを Table 3.3 ~ 3.7 に載せた。 T = 10000 K で評価したもの。

(collision strength) = (エネルギーとともに緩やかに変化) + (エネルギーとともに急激に変化)

superimposed resonance contribution

天文学への応用の範囲では、断面積を Maxwell 分布に ついて積分する(→ 3.19)ことで共鳴の効果は平均化される。

nebula の典型的な温度 ~7500 K では、衝突励起と下方遷移 に対する断面積は $\sigma \approx 10^{-15} Y / \omega \text{ cm}^2$ である。

(参考)

電子同士の弾性散乱に対する断面積 $\approx 10^{-13}$ cm² 光電離の吸収断面積 $\approx 10^{-18}$ cm²

ーつの level からなる term と、複数の level からなる term の あいだの collision strength には単純な関係が存在する。

$$Y(SLJ, S'L'J') = \frac{(2J'+1)}{(2S'+1)(2L'+1)}Y(SL, S'L') \quad (3.21)$$

S=0, *L*=0 の場合。(2*J*'+1) と (2*S*'+1)(2*L*'+1) は それぞれ、level と term の statistical weight.



 O^{++} のような p^2 または p^4 イオンの基底 3P から 1D と 1S 準位 への衝突励起率は ${}^3P_0, {}^3P_1, {}^3P_2$ の分布にはほぼ依存しない。

Table 3.3 ~ 3.5 中のイオンの全ての low-lying level に対して、 励起準位は基底準位として同じ電子配置から生じる。

これらの間の双極子遷移は selection rule で禁止されている。 しかし、磁気双極子または電気四重極子放射で生じる。 多くが紫外、可視、赤外の nebula spectra 中に観測されている。

これらの遷移確率を Table 3.8~3.14 に載せた。

低電子密度極限

衝突励起 → 光子放射

 $L_{\rm C} = n_{\rm e} n_1 q_{12} h v_{21} \qquad (3.22)$

通常の電子密度



衝突下方遷移が無視できなくなり、熱平衡方程式は $n_e n_1 q_{12} = n_e n_2 q_{21} + n_2 A_{21}$ (3.23) のようになる。

$$n_{e}n_{1}q_{12} = n_{e}n_{2}q_{21} + n_{2}A_{21} \quad (3.23)$$

$$= \frac{n_{2}}{n_{1}} = \frac{n_{e}q_{12}}{A_{21}} \left[\frac{1}{1 + n_{e}q_{21}/A_{21}}\right] \quad (3.24)$$

これより、放射冷却率は

$$L_{\rm C} = n_2 A_{21} h v_{21}$$

= $n_e n_1 q_{12} \frac{1}{1 + (n_e q_{21}/A_{21})} h v_{21}$ (3.25)

 $n_{e} \rightarrow 0$ の極限では (3.23) が再現される。

$$L_{\rm C} = n_2 A_{21} h v_{21} \qquad n_{\rm e} n_1 q_{12} = n_{\rm e} n_2 q_{21} , \quad \frac{n_2}{n_1} = \frac{\omega_2}{\omega_1} \exp\left(-\frac{\chi}{kT}\right)$$
$$= n_1 \frac{\omega_2}{\omega_1} \exp\left(-\frac{\chi}{kT}\right) A_{21} h v_{21} \qquad (n_{\rm e} \to \infty) \qquad (3.26)$$

熱力学平衡冷却率

3.5 Energy Loss by Collisionally Excited Line Radiation いくつかのイオンは2準位だけを持ち、単純な形式で扱えるが、 ほとんどのイオンはより多くの level をもつ。

ground configuration に p^2 , p^3 , p^4 をもつイオンは全て5つの low-lying level をもつ。



Fig 3.1

ex. O⁺⁺, N⁺ 図の全ての準位間で 遷移が起こりうる。 平衡方程式は、i=1.5 に対して $\sum n_j n_e q_{ji} + \sum n_j A_{ji}$ $= \sum_{j \neq i}^{J>i} n_i n_e q_{ij} + \sum_{i < i}^{J>i} n_i A_{ij}$ (3.27)with $\sum n_i = n$ (3.28)

$$\sum_{j \neq i} n_j n_e q_{ji} + \sum_{j > i} n_j A_{ji} = \sum_{j \neq i} n_i n_e q_{ij} + \sum_{j < i} n_i A_{ij} \quad (3.27)$$
$$\sum_j n_j = n \quad (3.28) \quad \text{for } i = 1, 5$$

これらから、各準位の相対的な割合が決まる。

$$L_{\rm C} = \sum_{i} n_i \sum_{j < i} A_{ij} h v_{ij} \, \operatorname{erg} \operatorname{cm}^{-3} \operatorname{s}^{-1} \quad (3.29)$$

低電子密度極限 $n_{e} \rightarrow 0$ では、(3.22) のような項の和になる。

$$n_{e}q_{ij} > \sum_{k < i} A_{ik}$$

i,*j* どれかに対して、衝突励起が放射遷移を上回ると、 衝突下方遷移が無視できず、完全な手法を用いるべき。

<u>準位 i に対する臨界密度</u>

$$n_{\rm c}(i) = \frac{\sum_{j < i} A_{ij}}{\sum_{j \neq i} q_{ij}} \quad (3.30)$$

放射冷却で重要な level の 臨界密度を Table 3.15 に 載せてある。

 $n_{e} < n_{c}(i)$ のとき、衝突下方遷移は無視できる。 $n_{e} > n_{c}(i)$ では重要となる。

H⁺ nebula で最も豊富 束縛状態無し、line なし H⁰ abundance は小さい が、放射冷却に寄与する



励起の断面積は *u*⁻² には 比例しない。

- 閾値までは zero.
- 閾値の数倍でピーク
- 高エネルギー側で減少

superimposed resonance

それでも (3.18), (3.19) で定義される collision strength は、 非常にゆっくりとした変化をする。Table 3.16 参照。

static nebula の各点での温度は加熱率と冷却率の間の 平衡で決定される、つまり

$$G = L_{\rm R} + L_{\rm FF} + L_{\rm C}$$
 (3.31)

低電子密度

G, L_{R}, L_{FF}, L_{C} の全ての項は n_{e} と幾つかのイオンの密度に比例する。

(3.31) とその結果である温度は total density には依らない。 様々なイオンの相対的な abundance に依存する。

衝突励起が重要になってくると、ある与えられた 温度での冷却率は減少する。

与えられた輻射場での平衡温度はある程度だけ上昇する。

<u>例:典型的な abundance を持つ HII 領域を考える</u>

 $\frac{n(O)}{n(H)} = 7 \times 10^{-4}, \quad \frac{n(Ne)}{n(H)} = 9 \times 10^{-5}, \quad \frac{n(N)}{n(H)} = 9 \times 10^{-5}$

これ以外の元素は簡単化するため無視する。 それぞれ 80% が単電離、20% が二階電離していると仮定。 $n(H^+) / n(H^0) = 1 \times 10^{-3}$ とする。



Temperature T

衝突励起による放射冷却 $kT \ll \chi t L_c \sim O$ 寄与は小さい kT~yのあたりでピーク kT>γではゆるやかに減少 高温側ではO⁺が重要な冷却源 低温側ではO⁺⁺が重要 free-free 放射による冷却 全体を通して寄与は小さい

Heating or cooling rate/ $n_e n_p$ (erg cm³ s⁻¹)

Fig 3.2



(3.31)を次のように書き直す。 $G - L_{\rm R} = L_{\rm FF} + L_{\rm C}$

左辺は effective heating rate

平衡温度は input stellar radiation にはさほど敏感ではない。

nebula の温度は ~ 7000 K 熱い星、または τ が大きい ところでは高くなる。

Fig 3.2

高電子密度下では衝突下方遷移で L_c はかなり修正される。 結果として nebula temperature も変化する。

ex. $n_{e} \approx 10^{4} \text{ cm}^{-3}$ (通常の多くの H II 領域でありうる) [O II] ${}^{4}S - {}^{2}D$, [O III] ${}^{3}P_{0} - {}^{3}P_{1}$, ${}^{3}P_{0} - {}^{3}P_{2}$ 20% 程度が有効 [N II] ${}^{3}P_{0} - {}^{3}P_{1}$, ${}^{3}P_{0} - {}^{3}P_{2}$ 1% 程度が有効 [N III] ${}^{2}P_{1/2} - {}^{2}P_{3/2}$ 20% 程度が有効

それぞれの臨界密度が Table 3.15 に載っている。



Temperature T

 $n_{\rm e} \approx 10^4 \, {\rm cm}^{-3}$

電子密度が高いと冷却率が 下がるので、平衡温度が 高くなっている。

重元素の abundance が 低い場合にも冷却率が 下がるので平衡温度は上がる。

Planetary nebula の中心部のような、非常に高電離な ところでは H⁰ や O⁺ や O⁺⁺ はほとんど存在しない。 → 放射冷却率はかなり減少する

主要な冷却源は Ne⁺⁴ や C⁺³ となり $T \le 2 \times 10^4$ K となる。

HII 領域、planetary nebula の両方のモデルの詳細は 5章。